

お盆には

滝川クリステルさんのように

私のお寺がある町に、500円をお支払すると10分間「逆さ吊り」にしてくれる健康施設があります。別に



あやしげな趣味の人が集まる場所ではありません。逆さ吊りに慣れると何とも心地良く、私など途中で寝てしまいます。更にその状態でお腹を触ってみますと、「俺の胃や腸はどこへ行ったんや？返してくれ！」と叫びたくらいぺったんこになっています。その後、お腹の調子が良くなるから不思議です。



さて、もうすぐ「地獄の釜の蓋も開く」というお盆です。正式には「盂蘭盆会」。亡き祖母はそう言って幼少の私を地獄図の赤い世界の前に座らせました。煮えたぎった大きな釜の上に、お釈迦さまの十大弟子のひとり目連尊者もくれんそんじゃの母上あが鬼に串刺しにされ、まさに釜茹でにされそうになっています。目連尊者はそれを見つけ泣き泣き自らの超能力で母を何とか餓鬼道の世界までは救い上げることが出来たそうです。古代インド語で「逆さ吊り」のことを「ウランバーナ」。これを漢字になおして「盂蘭盆」となったそうで、目連尊者の母上のような苦しみのある霊に対してお供養を奉げる行事が佛教の示すお盆でしょう。更に信心深き人は、「どうかしてそこを脱して、あなたも今度は人間界に生まれ佛と出会って下さいね」と願いを込めてお供えします。すると今度は、ご自身がこの世

にお生まれになった奇跡、不思議さ、感謝、歓びを感じるようになるでしょう。芥川龍之介著の『蜘蛛の糸』のワンシーンがしみじみと目に浮かんできますなあ…

では、お盆にご先祖さまの御霊が「里帰りされる」というのは佛教とは違うのでしょうか。

それは、滝川クリステルさんが世界中に発信した日本人の「お・も・て・な・し」の精神が生んだもう一つのスタイルだと私は思います。

私のお寺のある地域では、お盆が近づくとスーパーに紅白の瓜模様の提灯が売られます。



初盆用は真っ白なものが用意されています。100円前後とリーズナブルです。8

月13日にその提灯に竹の柄をつけお墓参りに行きます。そこで提灯の蝋燭に火を灯すとご先祖さまの御霊がお墓から提灯の中に入れ、それを家のお佛壇の前まで丁重にお運びします。私はそれを振り回して提灯が燃えてしまったことがありました。「おじいさん、まるこげや！」と叱られたものです。それから母は、15日の夕べまで3度のお霊供膳をこしらえます。毎年各メニューは決まったものがありました。その他に盆踊りをして賑やかにするのも、里帰りされたご先祖さまへの「おもてなし」と言えるでしょう。

15日にもなると母も疲れてきます。そんな昼ご飯には皆で「しめ鯖」を食べます。家の中に生臭さが充満し、それを嫌ったご先祖さまは自らあの世へと帰っていかれます。これも立派なおもてなしの作法と言えるでしょう。俊徳丸